



第 195 号

令和 6 年 5 月 31 日

編集 旭川医科大学
発行 学生支援課

(題字は初代学長 山田守英氏)



「菜の花畑」(滝川市)

(写真撮影：学生支援課)

入学おめでとうございます

—令和6年度入学式式辞より……学長 西川 祐司…	2
令和6年度入学式を挙行了しました……………	6
旭川医科大学に入学して…医学科第1学年 井上 真知…	7
旭川医科大学に入学して…医学科第1学年 渋谷花鈴音…	7
旭川医科大学に入学して…医学科第1学年 吉岡 朱音…	8
旭川医科大学に入学して…医学科第2学年 小川 雅泰…	8
旭川医科大学に入学して…医学科第2学年 佐藤 千文…	9
旭川医科大学に入学して…看護学科第1学年 柿崎 壘…	9
旭川医科大学に入学して…看護学科第1学年 平野 綾音…	10
旭川医科大学に入学して…看護学科第1学年 原 埜乃佳…	10
教授就任のご挨拶……………心理学 教授 池上 将永…	11
教授就任のご挨拶……………化学 教授 眞山 博幸…	13
教授就任のご挨拶……………看護学講座 教授 小田嶋裕輝…	15
教授就任のご挨拶……………生物学 教授 日下部博一…	17

教授就任のご挨拶……………看護学講座 教授 平 義樹…	19
就任のご挨拶……………看護学講座 教授 菅原 峰子…	21
就任のご挨拶 …内科学講座(内分泌・代謝・膠原病内科学分野) 教授 野本 博司…	23
令和6年度 入学者ガイダンスを行いました……………	25
セミナー、講演会の開催報告—看護職キャリア支援センター…	26
令和5年度「助産師セミナー」&「助産師交流会」開催報告…	28
令和5年度 保健師セミナー開催報告……………	30
授業評価(令和5年度後期)……………	32
卒業生の動向(医学科)……………	33
卒業生の動向(看護学科)……………	34
令和6年度保健管理センター健康相談日……………	35
旭川医科大学役員等紹介……………	36
教員の異動……………	37



入学おめでとうございます —令和6年度入学式式辞より

旭川医科大学

学長 西川 祐 司

令和6年度に入学された医学科第一学年95名の皆さん、医学科第二学年・編入生6名の皆さん、看護学科第一学年60名の皆さん、ご入学本当におめでとうございます。開学以来、本学からの卒業生は、医学科で4,876名、看護学科では1,619名となり、合計で6,495名の有為な人材が育っています。卒業生は、さまざまな医療の現場で日夜患者さんのために尽力しています。また研究者として大学やその他の研究機関で研究に取り組む卒業生や行政機関において人々の健康を守る仕事に従事する卒業生も多くいます。さらに活動拠点も日本だけでなく、世界各国の大学や研究所、そして世界保健機関（WHO）などにも広がっています。これまで本学の卒業生は各界から高い評価を受けてきました。皆さんも先輩と肩を並べ、追い越すつもりで、医学・医療、そして看護学に貢献されることを願っています。

2019年末から続いたコロナ禍の影響で皆さんのこれまでの勉学や学校生活にはかなりの制限が加わったことと思います。本学でも感染蔓延期にはオンライン授業・実習、分散登校の形をとらざるを得ませんでした。しかし、ようやく新型コロナウイルス感染も収束に向かい、大学生活もほぼ正常化しました。大学生にとってかけがえのない同級生や先輩、後輩たちとの交流や教員との直接的な対話が通常通り行えると思います。ただ、感染はまだ完全には収束しておらず、皆さんも私たち教職員も感染防止に十分配慮しなければいけません。大学側では皆さんにはマスク着用を求めませんし、自由に行動していただいて結構ですが、大学に直結している大学病院は当面はできるだけ立ち入らないようにしてください。もしやむを得ず病院に入る場合には必ずマスクを着用してください。今日から、皆さん学生も本学の構成員です。私たちには大学病院を受診し、治療を受ける患者さんたちを守る大切な責任があることを認識していただきたいと思います。

本学は1973年の11月5日に創設されました。昨年は本学にとって記念すべき50周年に当たり、11月4日に50周年記念式典を挙行了しました。看護学科は1996年に開設されましたので、2026年には開設30周年を迎えます。本学は、当時の医師不足を解消するために各地に創設された新設医科大学の中でも最初に誕生した大学の一つです。私は1978年に入学した本学の第6期生で、ようやく医学科の全学年が揃ったという揺籃期の本学で私たちは教育を受けました。教職員も学生もレベルの高い医科大学を作り

上げようと何事にも情熱をもって取り組みましたし、仲間意識も強かったと思います。私はそのような環境で学生生活を送り、その後大学院で病理学を学び、留学するまで助手として教育、研究、病理診断に携わりました。このような貴重な経験ができたことを今でも誇りにしています。建学当時の精神は現在も本学の根幹に息づいており、学長として、本学を日本でも有数のレベルの高い医科大学にしなければいけないと思っています。本学は学生を大切にし、学生を第一に考える大学であり、本学の教育目標は、入学した学生全員が自由な雰囲気の中でそれぞれの個性と才能を伸ばし、どこで仕事しようとも信頼され、一目置かれる人材を育成することです。

皆さんは医学、看護学を修めることを志しました。これらは人の命を扱う学問であり、習得するためにはかなりのハードルを越えなければなりません。これまでに蓄積されてきた膨大な医学、看護学の知識を学ぶ必要があり、医学科、看護学科のほとんどの科目は必修になっています。医学部卒業レベルに達するまでには相当な量の勉学や習練を要するのは当然であり、皆さんにはこれから受講する講義や実習には真剣に取り組んで欲しいと思っています。本学では定期試験を受けるためには講義の3分の2以上に出席することが条件となっているのですが、これは講義の3分の1は休んでもかまわないということでは決してありません。医学部における勉学はそのような甘いものではないことを入学したこの日に銘記してください。本学の教員は毎回真摯に講義、実習に臨んでくれるはずです。私は本学の学生にも毎回、真剣勝負で勉学するよう強く要請します。

そもそもなぜ学生時代に真剣に勉学しなければならないのでしょうか？もちろん、皆さんは本学を卒業して医師、看護師の国家試験に合格しなければなりません、これは当たり前のことです。なぜ真剣に勉学しなければならないのか、の答えはその先にあります。それは生涯にわたり、自ら学修する素養と習慣を身に付けるためなのです。医学、看護学は日々急速な進歩を遂げており、皆さんが大学で学んだ知識のかなりの部分はすぐに陳腐化し、通用しなくなっていくます。皆さんには医学、看護学を学ぶ上で、その先に無限に広がっている未知の世界を考えるようにして欲しいのです。難しいこと、わからない部分、不完全な部分を少しずつでも解き明かしていくことが私たちの務めです。そのためには、医学、看護学、生命科学に関わってきた人たちによる不断の努力の積み重ねにより作り上げられた現在の学問体系を修得する必要があります。学問の基礎と現時点における最新知見を学び、自ら考えるトレーニングを経て初めて次のステップに踏み出すことができ、既存の学問体系を乗り越えることができるのだと思います。

少し想像力を働かせれば、皆さん自身が医師になり、看護職者となって、実際に現場で働くと、答えがすぐには見つからない問題、まだ解明されていない問題に遭遇することはお分かりかと思います。皆さんに求められているのは、自分自身の中に問題を考える意欲や能力が備わっているかどうかであり、大学とはまさにそのような意欲と能力を

開発する場なのです。これらの本質にあるのは「研究する心」であり、これは研究者として生きる場合だけでなく、臨床の現場で働く場合でも、レベルの高い医療人を目指すならば欠かせないものです。本学に入学した優秀な頭脳に恵まれた皆さんには是非とも医学、看護学の領域を新しく切り開く人材に育っていただき、我々を乗り越え、将来の本学を担っていただかなければいけません。

研究者として真実を追い求めていくと、時に真理を明らかにした喜びを感じることがあり、実際これはかけがいのないものであり、研究者の生きがいではありますが、すぐに次の疑問が沸いてきて自分自身の理解が足りないことが自覚されます。「研究する心」は「科学する心」と言い換えることができるかと思います。「科学する心」は戦前に活躍された日本の電気生理学の草分けである偉大な生理学者、橋田邦彦先生が使われた言葉で、「固定した科学を科学する（動かす）ことによって自己の行とし、これを物心一如な人間の働き（心）としてとらえてゆくこと」とされています。科学を行とすることで私たちは必然的に謙虚になるはずですし、これは人間愛の根源となると思います。研究心を持つことは人のために尽くすべき医師、看護師の絶対に必要な条件であると考えていただきたいのです。

以上の通り、研究心は欠かすことのできないものですが、科学、医学、看護学は人間の知の一部に過ぎないことも事実です。学生時代に多くのことに興味を持ち、学内外の人々と人間的なお付き合いをし、さまざまな経験を積んでください。私は自分自身の経験から、身近にいて講義や実習でお世話になる先達としての先生方にいろいろ質問したり、話し合ったりすることをお勧めします。本学の先生方は研究者としてそれぞれのテーマに向き合い、解明しようと日々悩みながら努力を続けています。先生方は皆さんが真剣に向き合えば、けっして権威ぶることはなく、皆さんを仲間として扱ってくれるはずです。せっかく本学に入学したのですから、あらゆる機会をとらえて、是非先生方から他では得がたい「生きた教育」を受けて欲しいと思います。学生と先生はいずれも本学の構成員であり、対等の人間です。そして皆さんは共に学ぶ同級生と友情を育み、お互いに切磋琢磨するとともに、先輩、後輩とも広く、深く交流してください。良き人間関係を築く上では、目と目を合わせてきちんと挨拶をすること、お互いに尊重し合い、礼儀を尽すことが大切であることは言うまでもありません。本学に集う多種多様な人々との間で行われる人間修養が皆さんにとって将来にわたる財産となり、豊かな教養となっていくことを期待しています。また、本学では国際交流活動を積極的に支援していますので、海外での研修などを体験し、見聞を広めて下さい。

皆さんの中には初めて旭川で生活する人も多いかと思いますが、旭川は自然に恵まれた素晴らしい街です。私は旭川出身ではありませんが、この地を心から愛しています。皆さんにはまず旭川をよく知っていただき、この街とここに暮らす人々を好きになって

欲しいと思います。現在の日本では地方と都市の格差が広がっているように見えます。医療職を目指す高校生の皆さんと話し合う機会をこれまで何度か持ちましたが、残念ながら若い人たちにも強い都会志向が存在しており、保健・福祉・医療の面においても地方は都会に較べて劣っており、可能であれば自分達は将来そのような地方で仕事をしたくないし、住むことも避けたいという意識があることを感じました。しかし、地方と都会でそのような格差があるべきではなく、日本のどこに住んでいても適切な医療を受けられるような体制を作る必要があります。これは医療の均霑化と言われていることですが、私たちは常にこれを目指していかなければなりません。旭川も地方都市ですが、国立大学病院としての本学病院は現在望みうる最高レベルの医療を提供し続ける責任と義務があります。

本学は開学時から先端医療、先進医療とともに北海道、特に道北・道東地域の医療を担うことを期待されてきました。しかし、現在私たちは、日本の中でも少子高齢化が最も急速に進んでいるこの地域において、人的資源、財源の乏しい中で、いかにしてレベルの高い医療を提供し、地域の医療体制を維持していくか、というきわめて難しい課題に直面しています。この課題に対する解決策はまだ誰も見出せていませんが、私たちは現在、「マルチタスク型地域医療医の育成」という新しいプロジェクトを、大学を挙げて進めています。このプロジェクトは、それぞれ専門領域を持ちながら、地域医療に必要な総合診療、救急医療、僻地・離島医療、在宅医療の能力を併せ持つマルチタスク型医師を各診療科の協力をもとに養成し、地域において、一定期間で交替しながら流動的な形で活躍できるようにすること、そして本学として常に彼らを支援する体制を作ること为目标としています。医師および看護職者それぞれが目指すキャリアパスを実現するため、アカデミアとしての大学のレベルを高め、随時、研究活動や高度技術の習得が可能な環境を作ります。このプロジェクトが成功すれば近い将来の日本の医療危機を救うためのモデルケースになると思います。本学としては、このプロジェクトを最も重要なミッションかつ研究テーマに位置付けており、若い力と柔軟な思考力を持つ皆さんと協働し、地域の皆様に安心して暮らせる医療基盤を提供したいと考えています。

入学したすべての皆さんが実りある学生生活を送ることができるよう私たち教職員は全力を尽くします。6年後もしくは4年後に、皆さんには、病気に悩み、苦しむ弱い立場の方々の側に常に立ち、そのような人々に最高、最良の医療を提供できる心優しくて頼りがいのある医師、看護師に育っていただくとともに、将来の医学、看護学の発展に大きく貢献していただきたいと願っています。あらためてご入学おめでとうございます。皆さんの今後の成長と発展を心から祈念しています。

令和6年度入学式を挙行了しました

令和6年4月5日(金)10時30分から本学体育館において、令和6年度入学式を挙行了しました。今年度は5年ぶりにご家族の皆様にも入学式にご参列いただくことができました。

入学式では、新入生一人一人の名前が読み上げられ、医学科95名、医学科第2年次編入学6名、看護学科60名が入学を許可されました。

続いて、入学生を代表して医学科の学生から宣誓が行われ、西川祐司学長からの式辞では「本学に集う多種多様な人々との間で行われる人間修養が皆さんにとって将来にわたる財産となり、豊かな教養となっていくことを期待しています」と新入生に向けて激励の言葉が贈られました。



入学生代表宣誓



式辞(学長 西川 祐司)



入学式の様子

旭川医科大学に入学して

医学科第1学年 井上 真知



念願の旭川医科大学に入学して大学生としての1か月が経過しました。

この1か月間で私が感じたこと、これから大切にしたいことを自身へのアドバイスの意味も兼ねて下記に記載いたします。

- ①心身ともに健康であること—当たり前ですが6年間の膨大な勉強をこなし医師になるための基礎を確立するためには健康であることが必要です。将来は人の生命と健康を守るプロフェッショナルになるわけですから、まずは自身の健康について自己管理を徹底していききたいと思います。そのために心身の健康を保つための食事、睡眠に気を配った(なるべく)規則正しい生活と運動を大切にしていきたいです。
- ②謙虚さと積極性—6年間、同期の人たちと苦楽を共にして学び、お互いを支えあっていくという、ある意味での覚悟が必要になってきます。「無事卒業して医師になること」は私を

含むすべての学生の皆さんの最重要ミッションですが、完遂するためには先輩や先生方とも良好な関係を築きご指導いただけるようになることも不可欠です。自分にとって大切な仲間、先輩、先生方であることを常に忘れず、謙虚さを持ちつつも積極的に過ごしていきたいです。

- ③人間として成長すること—同期や先輩方と接すると皆さんが博識多才であることや学生として意識が高いこと、それでいて人としての優しさやリーダーシップを兼ね備えている点に感動します。このような人間的成長を遂げることができる絶好の機会をいただいたことについて感謝の心を忘れず、自分もこれから内面を磨き、後進に対して胸を張れるような人間になりたいと思います。
- ④楽しむこと—上記のとおり果たすべきミッションやタスク等色々ありますが、やはり楽しむことも同じくらい大切です。人生でこれだけ自由な時間が与えられる機会は二度と来ないと思いますので旭医生活を存分に楽しんで過ごしていきます。

旭川医科大学に入学して

医学科第1学年 渋谷 花鈴音



旭川医科大学に入学して、早くも1ヶ月が経過しました。今年は5年ぶりに新入生歓迎会が行われ、緊張していた大学生活も楽しく迎えることができとても嬉しく思います。私は中高一貫校出身でありあまり変わらない環境の中で過

ごしてきましたが、大学に入学し本州出身の人とも出会いました。全く異なる環境で育ってきた人々と話すことは新鮮でとても楽しく、毎日刺激を受けています。

私は国際医療人特別選抜枠という枠で入学しました。この枠で入学した学生は、色々なセミナーに参加する機会を頂いたり、月に1度の医療英語に関する講義をして頂いたりします。そして、私は早速第1回の講義に参加しました。アメリカの医師国家試験に関することや世界各国への留学について学びました。大学1年生のうちから将来の医師像を考える機会を頂けたことに感謝し非常に興味を持ったと同時に、私自身の情報量、英語力が不足していることを思い

知らされました。英語は海外留学や海外で働くのに必要なスキルであることはもちろん、日本国内で働く上でも大切です。北海道は日本を代表する観光地であり、様々な国から多種多様な観光客が訪れます。日本語でのコミュニケーションが困難な外国人の方々と英語でコミュニケーションが取れることは診察する上でも患者さんの精神的にも非常に重要だと思います。学校生活6年間を通じて医療英語を自発的に学び、座学だけでなくコミュニケーション力の強化も目標にどんな場所でも活躍できる医師になりたいです。

大学生になり、私は新しく雪艇倶楽部に入部しカヌーを始めました。今まで経験したことはありませんでしたが、自然の中美しい景色に囲まれてスポーツをできる点が非常に魅力的で、学校生活がより充実したものとなっています。

6年間という長い学校生活では、楽しいことも辛いことも経験することとなると思います。経験する全てのことに真剣に向き合い、将来立派な医師になれるよう日々努力していきたいと思っています。

旭川医科大学に入学して

医学科第1学年 吉岡 朱音



旭川医科大学に入学して早くも1か月が過ぎて、私も旭川医科大学生であるということに実感がわいてきました。1年生では基礎教養科目が多いですが、高校の授業とは違い医療にまつわるお話も聞くことができ、医師を目指すものとしてはとても興味深いと感じます。2年生からは解剖実習など、本格的に医学を学ぶ機会が増えてくるのでとても楽しみにしています。

私は北海道音更町出身で、一年浪人し入学しました。入学する前は年齢の壁について少し不安に思うところもありましたが、全くの杞憂で、入ってみれば様々な年齢の人がいて、年齢に関係なく医学の道を志し、同じ大学生として共に学べる場所がありました。そんな仲間と切磋琢磨し、どんな大きな壁も乗り越えていきたいです。そしてまだ話したことのない人も多くいるので、様々な人と交流出来たらと思います。また、先輩方は本当に優しく、わからないことや

心配なことなど親身になって教えてくれました。新たな環境の中、不安でいっぱいだった私は、先輩や同期にとっても救われました。

旭川医科大学には多くの部活動があり、4月の間は様々な部活体験に行きました。どの部活も勉強との両立を大切にしながら、それぞれの活動に励んでいるのがとても分かりました。私は軟式テニス部に入部しましたが、もちろん勉学にも精一杯励みながら、部活動を通して大学生活を充実したものにしたいです。

まだ6年間という長い大学生活のスタート地点で、わからないこととこれから起こることへの期待でいっぱいです。私はこれからの大学生活で学内、学外問わず多くの人と出会い、様々な考え方や価値観を学んでいきたいと思っています。また大学生になればできることも増えるので、6年間を無駄にしないよう大学生でしかできない経験を数多くしていきたいです。そうして医師としても一人の人間としても立派な人に成長していきたいと思っています。

旭川医科大学に入学して

医学科第2学年 小川 雅泰



年を重ねるにつれ時間の進む感覚は速くなっていく一方ですが、2024年の4月は振り返る暇もない速度で過ぎていきました。

私は一度、4年制の大学を卒業し、社会人としての経験を積んだ後に、旭川医科大学医学部医学科2年次に国際医療人枠で編入しました。生まれ育った東京都を離れ、旭山動物園以外に足を踏み入れたことのない旭川への移住は、エキサイティングそのものです。引っ越した3月末には雪がところどころ残っていて、4月の中旬頃までは降雪もあり、雪が降ると全交通が麻痺する地に住んでいた者にとっては異世界でした。と思えば凄まじい勢いで気温が上がり、いつの間にかほとんどの雪が解け、その変化の速さには驚かされます。昨年の二次試験で訪れた夏の暑さを思い出すと、今から冷や汗が止まりません。

そして、私にとって6年ぶりの大学生活、そ

れも医学部での学びは新たな挑戦の連続です。授業初日の前日に公開された講義スライドを恐る恐る確認すると、そのボリュームと密度に息を呑みました。学習事項が多い科目や、アタマで考えるだけではうまくいかない実習科目など、医学部での学びの深さは、経済学と情報科学を学んだ私には日々新鮮です。また、今年の編入生は6名で、異なるバックグラウンドをもつ者同士お互いに刺激を受けつつ、一般生の皆さんとの交流も徐々に増えてきました。一般生の皆さんからは親切に接してもらっており、これから実習や課外活動等を通して仲を深めていけたらと思っています。

まだ始まったばかりではありますが、医学という深遠な学問に没頭することができるこの環境は文字通り「有難い」もので、この機会を頂けたことに心から感謝しております。目の前の講義や実習に対して真摯に取り組む一方で、医学・医療に対する視野を国内外にかかわらず広げ、より良い医療貢献ができるよう日々思索し行動していきたいです。

旭川医科大学に入学して

医学科第2学年 佐藤 千文



私は社会人から長かった受験勉強を経て、ついに今年の春念願の旭川医科大学に編入することが出来ました。待ちに待った入学式、同じ志をもった仲間との出会い、医学部の授業など全てが新鮮さと感動に包まれた一か月でした。授業ではどの先生たちからも

熱心に教えて頂き、わからない所は授業中や授業終わりに丁寧に教えて頂き旭川医科大学に入学出来て本当に良かったと思えました。また、慣れない学生生活も同期や先輩に沢山助けられ、学生生活を乗り越えていくためには環境や仲間がとても重要であると感じました。夢へのスタートラインに立った今、私がこの貴重な学生生活で大切にしていきたいことが3つあります。

一つ目は、「地域医療に貢献するいい医師になる」ということです。膨大な知識量や苦手な科目でわからなかったり、勉強することが嫌になったり、勉強以外のことで落ち込んだり、やる気がなくなったりすることもあります。しかし、そんな時に私が必ず思い出すことがあります。それは、単に「医師になるため」ではなく

「地域医療に貢献するいい医師に絶対になる」ということです。この一本筋を通し忘れなければ、勉強や勉強以外の悩みがあった時に自分の目指す所がぶれないのでより強く前に進んでいけると感じています。

二つ目は、「沢山失敗して恥をかく」ということです。本当に失敗できなくなってくるのは医師免許を取得した時であり、成長するための貴重な材料である失敗をすること、恥をかくことを恐れず、大いに成長していきたいと思っています。

三つ目は、「人との繋がりを大切にする」ということです。出会った人々を大切に、どんな人からも学び一緒に成長していきたいと思っています。

以上のことは、将来私がいい医師になるための礎になると確信しています。医師になりたいと思った原点を忘れず、そして旭川医科大学で学べる喜びと感謝を胸に、旭川医科大学の信念である、北海道の地域格差をなくし、どこに住んでいても患者さんが平等に医療を受けられるようにする為には自分には何が出来るのかを日々考えながら学生生活を送っていく決意です。

旭川医科大学に入学して

看護学科第1学年 柿崎 暁



旭川医科大学に入学して約1か月が経ち、高校とは違う環境のなかで様々なことを経験することができました。憧れを抱いた大学で、4年間を共にする仲間とそれぞれの夢に向かって日々励んでいます。

看護男子として周りとうまくやっていけるか、高校とは

全く違うシステムへの対応など不安な気持ちがありました。想像以上に充実した大学生活を送っていると思います。今年も各部活で新入生歓迎会が行われ、先輩方との交流や同期同士の仲も深めることができました。先輩の皆さんは優しく、気さくに話しかけてくださりチームで立てた目標に向かって日々努力を重ねています。

大学生となり、高校生よりもできることが増える分、気が緩む瞬間もありますが、看護師という夢に向かって学生の本分である勉学に励んでいます。高校と大学の違いとして大学には主体性が重要だと思います。高校での授業では板書をノートに写していた受動的な授業から、大

学では事前学習を行い、講義内容を聞いて理解する能動的な授業へと変わっています。授業はすでについていくのに必死で事前に配付された資料で予習を行い、一つの講義に対して多くのことを吸収できるように毎日、授業内容を理解するのに一苦労です。しかし、看護師という大きな目標に向けて、これから様々な困難や不安もありますが、将来の夢である職業に就くために希望に満ちています。

これから目標である看護師に必要な知識や技術はもちろん、今日の社会の出来事や問題など様々なことを常に勉強しながら、日々成長しなければなりません。何事も学び続けることは患者さんに看護を提供していく中で非常に重要であると同時に自分の理想としている看護師像に少しでも近づくための方法としてこの大学生活で特に意識していきたいです。

高齢社会が深刻化していく中で、地域に住む方が安心して過ごせるような医療提供ができる医療従事者を目指して仲間と共に大学生としての自覚を持ち、精進していきたいと考えています。

旭川医科大学に入学して

看護学科第1学年 平野綾音



私は約1か月前に旭川医科大学に入学しました。入学当初、連絡事項が紙に書かれて配付されるという高校のシステムが当たり前だと思っていたため、大学のシステムにはついていけないこともありました。各授業の連絡や授業資料を頻繁に確認する必要があったり、用事があれば自分で教授にメールをしたりと、自力で行動することを求められる場面が多くあります。まだまだ未熟なため、この大学で看護学だけでなく、大人としてのマナーと自己管理能力を身に付けていきたいと考えています。

自立が求められること以外に高校と大学では、自由度が大きく異なります。高校では授業の始まりと終わりにチャイムが鳴り、決まった時間を教室で過ごすなければなりません。しかし大学では、授業が早く終われば教室を出て、どこへでも行けます。

その自由さのおかげで、友人と飲食店に行ったり、図書館で勉強したり、バイトに行ったりと

とても充実した日々を送っています。

私の現在の目標は二つあります。一つ目は部活で、先輩方のように優しくすぐに行動できるマネージャーになることです。入学して、先輩方のコミュニケーション力と気遣いのすごさにとっても驚きました。憧れが大きく、自分も先輩方の良さを受け継ぎたいです。二つ目は、計画的に学習することです。看護師として働く際、数多くのタスクをこなす必要があります。授業でさまざまな課題が出されていますが、将来に役立てるために、優先順位をしっかりと決め、計画的に勉強に取り組む力を育んでいきたいと考えています。

現在少子高齢化で認知症者数が増加していて、将来看護師として認知症の方と関わる機会が多くなると考えます。私には入学前から、認知症看護認定看護師として認知症の方とその家族が幸せに暮らせるようにするという目標があります。目標を達成するために、学習に専念できる環境が整っているこの大学で4年間精一杯の努力をしていきます。

旭川医科大学に入学して

看護学科第1学年 原 埜乃佳



旭川医科大学に入学して、1ヶ月が経ちました。今年はコロナ禍では行われていなかった新歓パーティーが復活しました。そこで、たくさんの部活があることを知れ、先輩達と話せたことで大学生活の話聞くことができ、大きかった不安を軽くなった状態で学校生活をスタートさせることができました。

最初は、授業の受け方で初めてのことがばかりで戸惑うことも多かったです。高校とは違い、教科書や講義資料は事前に自分で用意しなければならず、受け身ではついていけないことを実感しました。そして、入ってくる情報が多いので、周り確認し合うことや先輩方に相談してアドバイスを貰うことは、負担を少なくし楽しむ時間を作るために大切だと思いました。まだ進むのが早い講義について行くのに慣れないこともあります。試行錯誤を続けて自分にあった授業の受け方を見つけていきたいです。

また、部活動が想像以上に盛んであるという印象を受けました。種類が多く、どれも楽しそうでした。医療系の部活があることや、自由参加の部活も多く兼部しやすいことも大学らしいと思いました。私は、新しい挑戦として合唱部に入部しました。分からないことが多いですが、いろんな先輩が気にかけてくれ、優しく教えてくれるのでなんとかついて行くことができている。普段は関わる機会が無い他学年や医学科の交流の場所にもなり、いろいろな人と話すことができます。それぞれ違う話ができる新しい発見があるので面白いです。

大学では、絶対一人で勉強してはいけないと言われます。量が多く、一人でやりきるのは困難だからです。今まで勉強は一人ですることが多かったため、これからは周り協力し合って計画的に頑張っていきたいです。協力し合うことは看護職になったときにも必要なので、積極的に人と関わっていきたいです。さらに大学生は社会人の一歩手前なので自分の行動に責任を持って充実した日々を送っていきたいです。



教授就任のご挨拶

一般教育 心理学

教授 池上 将 永

このたび、2024年（令和6年）3月1日付で、旭川医科大学心理学の教授を拝命いたしました。一般教育学科目「心理学」は、1973年の本学設置と同時に開講され、岩淵次郎初代教授によって教室の基盤が築かれました。その後、1999年に高橋雅治教授が二代目教授として就任され、医学部における心理学教育の一層の充実に尽力されました。伝統ある旭川医科大学心理学の教授を拝命しましたことは、私にとって身に余る光栄であり、同時にその責務の重さに身の引き締まる思いです。

私は京都の出身ですが大学進学に際して地元を離れ、茨城県つくば市で大学・大学院時代を過ごしました。その当時は北海道に特別な縁はなく、旭川についてもほとんど知らないままでした。ところが、大学時代の友人が卒業後、改めて医師を目指すために旭川医科大学に入学することになり、彼に会うために旭川を訪れる機会がありました。それが私の旭川との馴れ初めです。初めての旭川では空の広さに感動した記憶があります。その後、不思議なご縁で高橋雅治先生にお声がけいただき、旭川医科大学心理学教室に教務職員として着任することとなりました。友人を訪れた時には、まさか旭川医科大学に在籍することになるろうとは思っていませんでした。以来、二十年以上に亘って旭川医科大学にお世話になっております。教育・研究のなにもかまが分からないところからスタートした、未熟な私を支えて下さった高橋雅治先生をはじめ、旭川医科大学の皆様には感謝の言葉もありません。旭川医科大学は私にとっては第二の母校のような存在であり、大学の更なる発展に貢献できるよう、微力ではございますが尽力していく所存です。

ところで、近年の医学部教育においては「行動科学」が重要な学習分野として取り上げられています。「心理学」と「行動科学」はどのような関係にあるのでしょうか？行動科学はbehavioral sciencesと複数形で記述されるように、ヒトや動物の行動の仕組みを幅広い枠組みで捉えるための学際的分野です。辞書的に言えば、行動科学は、心理学をはじめとして、社会学、文化人類学、精神医学、教育学、言語学、認知神経科学、さらには政治学や経済学などの諸科学を含む大家族のようなものです。このように、行動科学本来の指す内容は極めて多様ですが、医学部においては「行動医学」と置き換えると理解がしやすいかと思われれます。人が健康な生活を送るためには、生物学的側面だけではなく「毎日の習慣＝行動」が大きな役割を果たします。我々の行動は、遺伝的

特性、経験、環境、文化によって形作られており、行動を理解するためにはこれらそれぞれからの視点が必要になります。心理学や発達心理学の授業・実習では、人の行動の根底にある心理過程や発達過程を学んでもらい、自分自身の成り立ちや、ひいては将来出会う患者さんの行動を幅広い観点で捉えられるようになってもらいたいと考えています。心理学で学んだことが、行動医学の基盤となって後年役立つことを願っております。

研究に関しては神経発達症、特に注意欠如・多動症（ADHD）の行動特性を対象としています。小児科の先生方に多大なご協力を頂きながら、ADHDの診断補助に応用できる認知・行動検査を作成する研究を行っております。私は、ADHDに関わる行動特性の中でも特に衝動性（待てない傾向）に注目しています。今すぐ手に入る小さな報酬と将来手に入る大きな報酬を比べたとき、将来の報酬の主観的価値が大きく割り引かれてしまうと、未来が待てなくなってしまう。このような傾向は、今すぐの刺激・報酬を求める嗜癖行動にも関連していると考えられています。未来を信じて今の行動を制御するという事は、誰にとっても難しいことです。特に現代は目の前をたくさんの刺激が飛び交い、未来についてじっくり考える時間が少なくなっていると感じます。学生の皆さんには、今を楽しむと同時に未来に思いを馳せる時間をたくさん持っていただきたいと思います。

最後になりますが、これまで支えていただいた旭川医科大学の諸先生方、事務職員の皆様には改めて感謝申し上げます。今後ともご指導ご鞭撻を賜りますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。



教授就任のご挨拶

一般教育 化学

教授 眞山 博 幸

この度、2024年3月1日付で化学教授を拝命いたしました。化学教室は新しい体制となりましたので、医学科1年生をはじめとする医学部の基礎教育や大学運営により一層取り組んでまいります。どうぞよろしく願いいたします。

まずは簡単に自己紹介させていただきます。出身は安平町（市町村合併前は早来町）です。苫小牧市の北に位置しています。地元の中学校を卒業後、国立苫小牧工業高等専門学校で工業化学科で化学教育を5年間受けた後、北海道大学工学部応用物理学科に編入学、学部卒業、修士課程と博士課程に進み、博士（工学）を取得しました。その後、京都大学大学院理学研究科で博士研究員（ポスドク）、北海道大学電子科学研究所で助教を経て、2012年9月1日に旭川医科大学一般教育化学教室に准教授として着任いたしました。北大在学中は一人でよく大雪山を登っておりまして、旭川は憧れの地でした。憧れの地で教育と研究に携わることができ、大変光栄です。

研究では医学と共通するテーマ（生体と生命現象に関するもの）に化学と物理学の立場から取り組んでいます。これまで取り組んだ研究テーマとしては、(MRIの原理となっている)核磁気共鳴(NMR)を用いたポリペプチド鎖の高次構造変化測定(学部4年生)、銅酸化物高温超伝導体の電子物性(修士課程と博士課程)、単一高分子鎖の高次構造転移(京大ポスドク)や、エネルギーと物質の出入りのある環境での構造形成やパターン形成(京大ポスドク)、北大～現在はフラクタル、柔らかい表面の濡れ・摩擦・付着です。いずれも医学と密接に関係したテーマです。学内での研究に貢献したいと考えております。

本学での教育について簡単に説明させていただきます。化学教室は、医学科1年生の自然科学入門(化学系)、基礎化学(通年)、基礎化学実習(後期)、初年次セミナー(前期必修科目で講義サポートとして関与)、看護学科1年生の看護化学(前期選択必修科目)、医学科1年生と看護学科1年生の後期選択科目の科学論文の読み方書き方(講義を分担)、医学科4年生の医学研究特論を担当しています。以下に基礎化学と基礎化学実習での取り組みについて簡単に説明させていただきます。

基礎化学では、原子の世界、分子の世界、有機化合物の構造と性質、分光学、分子集団の現象、自由エネルギー、化学平衡、膜電位、化学反応、酸化・還元、生体分子・高

分子・生体高分子といった内容を連続的につなげて教えています。以前の基礎化学はいわゆる“教養科目”であるとして教えられていた時期もあったように聞いておりますが、2012年10月に着任した先代の秋田谷教授以降、化学教室では基礎化学は医学とつながっている“実学”であることを強く意識し、講義中に医学とのつながりをできるだけ提示しながら教えるよう心掛けています。また、各学生の理解や学生自身の気づきにつなげられるよう、講義資料等（練習問題、模範解答、問題解説含む）を作り込みながら色々と模索しています。化学教室に対して過去のイメージをお持ちの先生方が多いかと思いますが、現在の化学教室は全く違う状況にあるものと自負しています。その一方、コロナ禍以降は質問に来る学生が激減しており、学生の質の変化も感じています。

基礎化学実習では実習内容の説明だけでなく、安全教育も行っています。具体的には白衣の正しい着用方法、正しい服装（頭髪から履物まで）、実験器具や測定装置の正しい使用方法、危険な試薬をこぼしたときの対応方法、実験終了後の薬品の廃棄の仕方、実験器具や測定装置の片付け方等などです。動画を使いながら説明するなど工夫しています。また、コロナ禍前の実施方法（4名で協力して実習する）から、学生一人ひとりが実習を行うスタイルに変更しました。その結果、学生はしっかりと一人で実習を行い、教員も各学生へ丁寧に指導を行うとともに、各学生の实習態度を詳細に把握できるようになりました。実習態度には座学では垣間見ることができない学生の個性が反映されますので、今後、上の学年での学生指導に必要な基本的情報になると考えています。

大学外では地域貢献として放送大学（講師）、わくわくサイエンス（展示）、スーパーサイエンスハイスクール（研究指導）に携わっています。また、近隣の教育機関や研究機関の先生方とも研究交流しておりまして、共同研究へと発展させたいと考えています。今後、地域貢献により一層貢献してまいります。

私と室崎講師の2名で化学教室を運営しておりますが、これもひとえに旭川医科大学の諸先生方や事務職員の皆様に支えられているおかげです。この場を借りまして心より御礼申し上げます。今後ともご指導ご鞭撻を賜りますよう、どうぞよろしくお願いいたします。



教授就任のご挨拶

看護学講座

教授 小田嶋 裕 輝

この度、令和6年（2024年）3月1日付で、看護学講座の教授として拝命致しました、小田嶋裕輝（おだじまゆうき）と申します。当講座は看護学に関わる12領域より構成され、私は成人看護学の領域教授です。

旭川医科大学は医学部を有する日本最北端の国立大学であり、道東・道北に居住される道民の皆様、医療における最後の砦としての機能を果たすべき立地にあります。大雪山を背景に織りなす四季折々の景色は、この立地の自然環境が如何に恵まれているかを教えてくれます。また、大学と廊下でつながっている旭川医科大学病院では、道東・道北を中心とする、様々な患者様と医療職が会おう場であり活気に満ちています。

旭川医科大学は道北・道東の地域医療に貢献すべく昭和48年（1973年）に設立されました。令和5年（2023年）に開学50周年を迎えました。また、その歴史の中で開設された看護学科は2026年（令和8年）には30周年を迎えようとしています。

“道北・道東の地域医療の質の維持・向上を如何にして図るか”。これが旭川医科大学に突き付けられた大きな課題だと思います。今の世界は、AI、IoT、ビッグデータといった用語に代表される第4次産業革命の只中にあります。これまで物理的な距離の問題によって不可能であったことが、可能になりつつあります。この時代性の中で、旭川医科大学のプレゼンスをどのように発揮していくのかが問われています。

道民の皆様に関心を、道東・道北の医療の拠点としての旭川医科大学に、より一層向けていただくには、国立大学法人としての覚悟が必要です。具体的には、①歴史を背負う覚悟、②現状に甘んじない覚悟、③未来を担う覚悟、です。

一つ目の歴史を背負う覚悟は、北海道の真ん中である旭川市に立地するという地の利から、道東・道北の医療のハブとしての役割を歴史的に負っているという使命を一層自覚することです。一般に人口の多いところには自ずと人が集まり、文化が集積することから、道央や道南は様々な医療機関が医療のハブとしての役割を発揮しやすい状況にあります。しかし、道東・道北は広域にわたり人口が大きく分散しています。本学は分散した医療ニーズを集約できる立地にあることから、道民の皆様は、道東・道北の医療は当大学が最終責任を負うことを期待しているはずです。今まで以上に地域に根ざした大学としての活動を認知されるように努めていく必要があります。

二つ目の現状に甘んじない覚悟は、日本最北端の医学部を有する国立大学法人として成長し続ける覚悟です。医師と看護師は車の両輪と言われ、両者が相まって初めて患者への良質な医療を展開することができます。医学研究と看護学研究も同様の関係にあります。道東・道北の道民の皆様の生活の質向上に向けて、研究成果の、医療現場や教育現場への還元を不断に果たすことで、地域医療の活性化に貢献する必要があります。

三つ目の未来を担う覚悟についてです。旭川医科大学は未来を切り開く良質な人材を輩出し続ける使命があります。地域住民の方々の、現在の、そして、これからの保健や医療のニーズに応える人材を輩出するために何が必要なかを議論し、実践していく必要があります。そのことによって旭川医科大学の法人格がより優れたものとして成長していくと確信いたします。

看護職は、援助の対象の生命力の消耗を最小にするよう生活過程を整えることを通して、その内部環境を整えることを専門とする職種です。歴史的にはフローレンス・ナイチンゲールが看護学の学問的地位確立に向けた礎となり、大学教育の中に位置づけられるまでの発展をなしてきております。

特に、旭川医科大学における看護学講座は医学部における一大講座として位置付けられ、今後の看護学の学問的な発展を担うために必要な、物的・人的資源に極めて恵まれています。

私は、この看護学講座の一員として、時代の要請に応えられる人材育成に努めて参ります。また、その人材が次の旭川医科大学の発展の担い手となるような仕組みを探求し、提案させていただきます。

看護学講座へのご指導・ご鞭撻のほど、よろしくお願い申し上げます。



教授就任のご挨拶

一般教育 生物学

教授 日下部 博 一

この度、2024年4月1日付で旭川医科大学生物学教室の教授を拝命いたしました日下部博一と申します。私は北海道芦別市で生まれ、高等学校まではオホーツク地域で育ちました。大学院時代は、青森県の弘前大学で生物学（哺乳動物の系統分類学）を専攻し、野生のネズミ（齧歯類と食虫類）の採集と染色体研究に没頭する日々を過ごしておりました。研究バックグラウンドが「哺乳類の細胞遺伝学」である私にとりまして、旭川医科大学の生物学教室の教授に就任させていただきましたことは身に余る光栄です。これまでご指導いただきました先達の先生ならびに関係者の皆様に、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

生物学教室では、1973年の開学当初から一貫して哺乳類配偶子をテーマとした研究が継続されています。私が初めて生物学教室を訪問したのは今から30年前です。当時の生物学教室は、ヒト精子の染色体解析法において世界屈指の技術をもつラボとして関連分野の中で高く評価されていました。私はその技術を習うために、当時勤めていた食品薬品安全センター秦野研究所から1週間程度の研修期間で生物学教室に派遣されました。初代教授の美甘和哉先生は既に退職されていたので、私が直接お世話になったのは二代目教授の上口勇次郎先生と、後の三代目教授である立野裕幸先生でした。その研修の後、美甘先生が秦野研究所に来所されたことがあり、その時に私は美甘先生から直々に技術的なご指導をいただいた記憶があります。若く未熟だった私は「直立不動の緊張感」に襲われ、その時何を指導されたのか今でもあまり思い出すことができません。そのような私でしたが、1999年に米国ハワイ大学生殖発生学の柳町隆造先生の研究室に留学する幸運に恵まれました。当時、私はまだ秦野研究所の職員でしたが、生殖生物学分野で世界的に有名な柳町研究室への留学に私を推挙してくれたのは上口先生と立野先生でした。ハワイでの私の仕事は、凍結乾燥精子の染色体異常誘発を抑制する方法を探索することでしたが、幸いなことに2年以内に一定の研究成果を得ることができました。私が現在もこの頃と同じ研究テーマを継続している理由は、当時の研究成果がまだ不完全であることを自覚しているからです。あるいは、当時の成功体験をもう一度味わいたいからかもしれません。そのようなわけで、私は教授に就任した今でも、自らの手を使って実験を行う「実験者」でありたいと強く思っています（若いスタッフに迷惑の

かからないように気をつけます)。

教育と研究は両輪であると言われますが、この言説は特に一般教育部門に属する当研究室のスタッフにとって開学当初から変わらない職務遂行上の方針でもあります。そして、初代教授が「医学部なのだから生物学教室の研究テーマは哺乳類を扱わなければならない」と申されたことを、先代教授から伝え聞いております。現在でも生物学上の知見の多くは確定しておらず覆される可能性があり、もちろん「ヒトの生物学」も例外ではありません。従いまして、哺乳類を研究テーマにすることは、アップデートされた最新バージョンの「ヒトの生物学」を学生に提供しやすくするために大きく役立っていると言えます。

一般教育部門に属する生物学教室の最も大事な仕事は、医学部入学初年度の学生に対する広い意味での「入門教育」だと思っています。その入門教育の内容には、各学生が自分に合った学修方法を確立するように促したり、実習・講義科目の受講態度の指導であったり、参考書や科学論文の選び方・読み方の提案などを含みます。今後も引き続き、生物学教室の敷居は低くして学生が訪問しやすい雰囲気を保ちながら、学生とのコミュニケーションを大事にすることを心がけます。そして教育センターや各部門の先生の御意見を伺いながら教育業務に邁進していく所存ですので、何卒よろしくお願い申し上げます。



教授就任のご挨拶

看護学講座

教授 平

義 樹

この度、令和6年4月1日付で、旭川医科大学看護学講座専門基礎医学領域の教授を拝命いたしました平 義樹と申します。当講座当領域は看護学科設置後間もない平成10年4月に形態機能学領域の初代教授として岩元純先生が、病態学領域の初代教授として木村昭治先生が就任され開設されました。平成21年岩元教授のご逝去により形態機能学領域は現在に至るまで教授不在の時期が続いて参りましたが、令和6年度より両領域が専門基礎医学領域として統合され、新たなスタートを切ることとなりました。このような節目の時期に領域の長を任されることは身に余る光栄でありますとともに、これまでより大きな責務を負うことに対して身の引き締まる思いであります。

私は旭川出身です。本学の旭川出身者の多くがそうであるように、旭川東高等学校を卒業し9期生として本学に入学いたしました。当時はまだ1期生も卒後3年目を迎える時期であり、新設大学の雰囲気の色濃く漂う時期でありました。そのためか学生と教員、職員との距離も近く良き師、良き友に恵まれた学生生活を送ることができました。卒業後は、当時中学校の先輩にあたる2期生の相田一郎先生が解剖学第二講座で助手を務められていたのがご縁で、学生時代から講座に出入りをしており、基礎医学に多いに興味がありましたのでこの講座にお世話になることに決めました。当初は大学院を考えていたのですが、相田先生が退職し助手の席が急遽空くことになり助手として採用され私の教育・研究生生活がスタートしました。当時、解剖学第二講座は松嶋少二教授が主催しており、教育では骨学、組織学及び神経解剖学を担当しており、また研究では松果体の機能形態学を精力的に行なっておりました。計量形態学が主な研究手法となっておりましたので、来る日も来る日も電子顕微鏡で写真を撮影し、細胞内小器官の大きさを計測することを繰り返しておりました。平成12年に松嶋教授から渡部剛教授に代替わりし、それに伴い私の研究対象も松果体から視床下部へ、視床下部から神経細胞のゴルジ装置へと変わっていきました。現在は生後発達過程にある神経細胞でのゴルジ装置の構造解析を行なっております。

教育と研究の他に社会貢献として高大連携事業がライフワークとなっております。市内の高等学校と連携し、高校生を大学に招いて実験実習を行うことを平成16年度より実施して参りました。一時は参加のべ人数が数百名に達する規模の事業となりましたが、

近年はコロナ禍の影響もあり一部の高校への出前講義のみとなっております。コロナ禍も収まりつつありますので再び発展させていきたいと考えております。

平成27年から縁あって看護学科で教鞭をとることとなりました。看護学科においても解剖学と生理学の教育と研究及び高大連携事業を引き続き行い現在に至っております。特に教育においては基礎医学を教育する立場として医学科の基礎医学講座との連携の重要性を痛感する日々であります。医学系の科目の実施に医学科との連携は不可欠であり、今後もこれまで以上に連携の強化を図っていく所存であります。

看護学科にも10年近く席を置くことになりましたが、看護学科はこの10年でカリキュラムの改正に始まり、OSCEの導入や日本看護学教育評価機構（JABNE）による看護学教育評価で適合を受けるなど大きな改革期に入っております。今後は看護教育モデル・コア・カリキュラムをベースとしたCBTの導入も考えられており、医学科と同様な変革を迎えることは必至です。看護学科の教員はこの変革に対応すべく日々努力を重ねております。奇しくも看護学科は令和8年に開設30周年という節目を迎えます。この変革の時期に教授職を拝命する意義を鑑み、微力ながら与えられた職務を全うしていく所存です。皆様におかれましてはご指導ご鞭撻のほどよろしく願いいたします。



就任のご挨拶

看護学講座

教授 菅原峰子

令和6年4月1日付けで、医学部看護学科高齢者看護学領域の教授を拝命いたしました菅原峰子と申します。私は道産子ではありますが、20年間北海道を離れ、新潟県、神奈川県そして東京都に所在する大学で看護教育、看護研究に携わって参りました。この度、ご縁があり旭川医科大学の看護学科で教授としての仕事を任せていただくことになりました。北海道、特に道北地域へ優秀な看護の人材を育成してきた大学での仕事ですので、光栄であると同時に責任の重さを感じ、教育、研究に一層努力する決意を強めたところでございます。

自己紹介もかねて、私の高齢者看護の研究テーマについて説明させていただこうと思います。私は札幌市内にある短期大学の看護学科を卒業後、5年間、急性期治療を行う病院で看護師として勤務いたしました。病棟看護師として一通りのことができるまでにはなり、業務は大変ではありましたが、良い同僚や先輩に恵まれ、勤務をしておりました。ただ、5年目くらいになりますと別の道を選択する看護師仲間がでてきます。私も自分のキャリアデザインについて考えるようになり、まずは将来を考える素材と時間を作るために四年制大学看護学部への編入を選択しました。この決断が私の人生の大きな分岐点でした。このとき出会った、師、仲間、そして研究テーマが今に続いています。

編入学の修業年限は2年です。その2年目には卒業研究の単位を取る必要がありました。高齢者看護のゼミへ配属され、卒論のテーマを「入院高齢患者のせん妄」としました。せん妄は急激に時間や場所がわからなくなったり、精神症状が出現するもので、高齢者においては入院や手術を契機に発症することが多く、せん妄がおこったことをきっかけに自立度が低下することもあります。臨床経験を振り返った際、病院は「病気を治療するところ」でありながら、高齢者では「病気は治った（または小康状態となった）が、入院前よりも生活の自立度が下がる」という事例は少なくなかったことがきっかけです。

せん妄をテーマに卒業研究をまとめる過程で、急性期における高齢者看護の課題を学び、それを看護研究という形で取り組むことに興味が湧きました。卒業研究をきっかけに修士課程へ進学をしました。修士論文、そして、後に修得した博士（看護学）の学位論文も高齢者のせん妄をテーマに執筆しております。修士課程修了後は、卒業研究の指導をしてくださった先生に声をかけていただき、大学教員として、そして道外での生活

の第一歩となりました。

日本では平成12年に施行された介護保険法や、そのほか、高齢者が地域で暮らし続けられるための施策が講じられてきています。特に平成20年代からは地域包括ケアシステムを構築し、「住み慣れた場所で最期まで」の実現が目標となっています。私の研究テーマは、一旦は治療のために住み慣れた場から治療の場へ移った高齢者が、また住み慣れた場に戻ってもらうことに役立つものと考えています。

本学看護学科の教育においては1～4学年に地域包括ケア論という科目がおかれています。初学者の頃から地域包括ケアを学ぶ学生さんと高齢者看護を考える機会が持てることをとても楽しみにしています。また、大学院においては、修士課程論文コースと高度実践コースを担当いたします。どちらもこれまで前任の服部ユカリ教授が多くの修了生を輩出なさっておられます。その功績を引き継げるよう、大学院教育にも力を注ぎたいと思います。そして、旭川市をはじめとする道北地域にお住まいの高齢の方々とそのご家族の暮らしに貢献できることを目指しております。この旭川医科大学医学部看護学科の教授としての任務は、私にとって新たな、そして大きな挑戦です。高齢者看護学領域の長としての役割や大学院教育など、未熟で至らぬ点もあるかと存じますが、何卒、ご指導ご鞭撻のほど、よろしく願い申し上げます。



就任のご挨拶

内科学講座(内分泌・代謝・膠原病内科学分野)

教授 野本 博 司

このたび、2024年4月1日付で当学に赴任させていただきました野本博司と申します。当講座の前身であります内科学第二講座（通称第二内科）は、1974年に初代教授石井兼央先生が開講され、1988年に第二代教授 牧野勲先生に、2003年に第三代教授羽田勝計先生に、2017年に第四代教授 太田嗣人先生へと引き継がれました。その後、2020年から現在まで内科学講座の再編が行われ、この度ご縁をいただきまして私が内科学講座内分泌・代謝・膠原病内科学分野の長として、第二内科としては第五代教授としての職を拝命いたしました。このように大変歴史のある講座をお任せいただくことは、身に余る光栄でございます。

私は北海道帯広市に生まれ幼少期を過ごし、函館ラ・サール高校へと進学いたしました。当学の同窓の先生方には十勝にゆかりのある方々や同校ご出身の諸先輩が数多く在籍しておられ、心強く感じております。高校卒業後は北海道大学医学部に進学いたしました。幼少期から鍵盤楽器・打楽器と音楽に触れて育ちましたが、大学では趣向をかえてマンドリンというイタリア発祥の弦楽器を主体とする全学の約80名程度のオーケストラに所属し、演奏とオーケストラの指揮者を生業とする、たいへん「学生らしい」大学生生活を送っておりました。一方で講義には比較的真面目に出席しておりましたので、試験前には私のノートのコピーが出回っていたようです。

地域医療を担う基幹病院にて初期研修を行うなかで様々な疾患をもつ患者さんに触れ、糖尿病・内分泌診療の面白さと奥深さに感化され母校である北大の旧第二内科に入局を致しました。同講座は当時、私の専門領域以外にも、リウマチ・膠原病内科と腎臓内科・血液内科も担っており、多種多様な疾患領域に触れる機会がございました。このような基盤が現在のご縁に繋がっているのかもしれませんが。大学院では糖尿病膵β細胞の転写因子に関わる基礎研究を中心に従事し、学位を取得しました。主には細胞株やげっ歯類を用いた検討を行ってまいりましたが、ヒトとマウスで膵島の構造や性質が大きくことなることから、実際のヒト検体を用いた検討を希望し、米国UCLAに留学いたしました。2年間という限られた期間ではありましたが大変貴重な経験であり、この頃の研究や生活が現在にまで至る大きな人生の財産になっています。若い皆さんも、機会があればぜひ貪欲にチャレンジ頂きたいと思います。

基礎研究に従事する一方で、病棟・外来業務を行いながら数多くの臨床研究にも携わらせていただきました。目の前の患者さんに対する臨床上の疑問点から出発して、結果を日々の診療に還元できる臨床研究は、基礎研究とはまた違った楽しさ・奥深さがあります。さらに細胞や実験動物を用いた研究は大学や研究機関でなければ困難ですが、臨床研究は倫理的・医学的に正しい手順を踏むノウハウと臨床的な洞察力、そしてリサーチマインドがあれば場所を問わずに行うことができます。臨床研究法の策定後に研究に対するハードルが上がったことは事実ではありますが、当教室は臨床を基盤とした教室でございますので、ぜひ「臨床研究といえば旭川医大の第二内科」と認知いただけるよう努めて参ります。そして私たちが発信していく内容が、今後の診療エビデンスの一端を担えることを目指したいと思っております。

これまでの研究や診療にご協力いただきました多くの諸先輩や同僚の方々、そして当教室に赴任させていただくに際しご助力を頂きました本学の事務の皆様へ、この場をお借りして改めて御礼申し上げます。当学の内科学分野の再編により、診療領域の明確化のみならず各講座の特色がより際立っていくと考えています。これまで当教室を支えて下さってきた強力なスタッフ陣のお知恵と、新たに飛び込んできた若い先生方のフレッシュな力をお借りしながら、当学の内分泌・代謝・膠原病学の発展のために尽力させていただきたく存じます。皆様には今後とも変わらぬご指導、ご鞭撻を賜りますようよろしくお願ひ申し上げます。

令和6年度 入学者ガイダンスを行いました

令和6年4月5日(金)、8日(月)、9日(火)の3日間、令和6年度入学者ガイダンスを行いました。入学者ガイダンスでは、奥村利勝副学長からの開会挨拶の中で本学の学生として遵守して欲しいこと、学習法及び修学上の注意点についてお話がありました。

医学科ガイダンスでは、教育センターの野津司教授から医学科カリキュラムについて、新入生へは医学科第1学年担当教員の高橋龍尚教授から編入生へは医学科第2学年担当教員の三好暢博教授から学生生活について説明がありました。

また看護学科ガイダンスでは、升田由美子看護学科長、藤井智子教授、山内まゆみ教授、看護学科第1学年担当教員の濱田珠美教授から看護学科での『学び方』、保健師課程や助産師課程の選択等について説明がありました。

新入生達は、緊張した面持ちで各説明者のお話に集中して聞き入っていました。最初は緊張気味でしたが、休憩時間などの交流を通じて、会の終わりには打ち解け合っている姿を見ることができました。



入学者ガイダンスの様子

セミナー、講演会の開催報告 – 看護職キャリア支援センター



「就職に向けた心構えセミナー」を開催しました

看護職キャリア支援センター キャリア支援部門（現・生涯学習支援部門）が開催している「就職に向けた心構えセミナー」は、学生のキャリア支援プログラム的一端として、就職活動が始まる看護学科3年生を対象としたセミナーです。その内容は、看護学科 長谷川博亮教授による【自分を魅せる履歴書の書き方】という講義、就職活動を終えた4年生にお話して頂く【就職活動に向けた先輩からのメッセージ】という構成になっています。また、今年度はそれに加えて、当部門が看護学生を対象に対応している「面接練習相談」について、看護職キャリア支援センターの白瀧美由紀先生から説明致しました。

長谷川博亮先生は、履歴書は「採用する側の方々には看護職を目指す自分を理解してもらうためのもの」であり、そのためには、「自分が自分を理解していることが重要である」と話されました。そして、履歴書を書き始める前に、自分を知る作業として「自己分析」の重要性を強調されていました。長谷川先生のお話を3年生と共に聴き、長谷川先生は3年生に日々の学生生活、実習における患者との看護体験を大事にするように伝えていたと感じました。また、履歴書の書き方として、文字の配置や大きさなどに細かな部分についても話され、「落ち着いて、丁寧に書く」、それが自分を理解してもらえるための「技」としてレクチャーしてくださいました。

就職活動を終えた4年生は、3年生からの質問にも答えながら、就職活動におけるご自身の体験や取り組み方の姿勢についてお話してくださいました。その内容として、「病院情報のキャッチの仕方」「就職活動と実習が重なる時期における調整方法」「当日の不安を払拭できるように十分に準備し、自信をもって臨んだこと」「履歴書に書く内容や面接での回答は自分の言葉で表現すること」など様々なお話を多岐に渡ってアドバイスしてくださいました。実際に取り組んだ人でなければ語れない話です。また、4年生の一人はパワーポイント資料をご提出くださり、それをを用いてご自身の就職活動についてご説明くださいました。就職前のお忙しい時期にご協力頂いた看護学科4年生の皆様には本当に感謝です。

参加者に行った終了後のアンケートでは、長谷川先生の講義と4年生からの体験談の両方に対し、「就職活動について具体的に学ぶことができ良かった」と高評価でした。

令和5年度は令和5年12月18日に全ての内容を対面形式で行う予定でしたが、当日が悪天候であったために対面とオンラインのハイブリット形式で長谷川教授からの講義のみを行い、看護学科4年生からのお話は令和6年3月5日に行いました。急な予定変更となり、ご迷惑をおかけした方々にお詫びいたします。来年度に向けて改善を図り、この企画をより充実してゆきたいと思っております。

これから就職活動に臨む看護学科3年生の皆さん、新社会人として羽ばたく看護学科4年生の皆さん、応援しています。

主催：看護職キャリア支援センター キャリア支援部門（現・生涯学習支援部門）



※開催の様子はホームページにも掲載しています。 <https://www.asahikawa-med.ac.jp/ncsc/archives/11426>

「先輩看護師と行う看護技術スキルアップトレーニング」を開催しました

令和6年2月27日、「先輩看護師と行う看護技術スキルアップトレーニング」を開催しました。この学習会は、卒業・就職を控えた4年生が旭川医科大学病院で勤務する先輩看護師と看護技術を練習し、安心して次のステージに踏み出すよう支援することを目的としております。基礎看護学領域から引き継がれ、看護職キャリア支援センターのキャリア支援部門（現・生涯学習支援部門）主催になってから今年で2回目の開催となります。

学生は4年生2名、3年生2名の計4名が参加しました。去年と同様の採血、点滴、吸引、持続的導尿の看護技術について4つのブースでトレーニングを行いました。各20分ずつのローテーションで、技術担当の先輩から熟練した技術をわかりやすくマンツーマンで指導をいただきました。参加した学生は積極的に取り組むことができ、先輩は学生からの質問にも丁寧に対応してくださいました。臨床現場での豊富な経験をもとに、技術を行うにあたっての患者さんのとらえ方なども説明され、より具体的で実践的な内容となりました。

練習後の交流会では、学生の皆さんは就職後の技術習得はどのようになされていくのかなど、就職にあたっての不安や疑問を相談しており、先輩からは様々な経験談をお話くださいました。終始和やかなひとときで、あっという間に予定時間を超えるほどの盛り上がりでした。学生・先輩看護師双方にとって、とても有意義な時間となりました。

終了後のアンケートでは、学生からは就職後の不安が軽減した、実践的な看護技術が学べてよかったなどの回答があり、先輩看護師も、学生の積極的な姿勢に刺激を受けた、臨床の看護師と学生が交流できるよい機会になるという声がありました。

来年度もぜひ、多くの学生の方の参加をお待ちしております。

主催：看護職キャリア支援センター キャリア支援部門（現・生涯学習支援部門）



※開催の様子はホームページにも掲載しています。 <https://www.asahikawa-med.ac.jp/ncsc/archives/11050>

「外国人患者対応能力向上に向けた講演会」を開催しました

令和6年3月1日、旭川医科大学医学部看護学講座 助教 吉原菜寿先生を講師にお招きし、「人とつながり支えあう国際協力—青年海外協力隊の経験から—」をテーマにご講演頂きました。吉原先生は、2014～2016年の2年間に渡り、ニカラグアで国際協力機構（JICA）の青年海外協力隊として活動されました。国際協力として、現地の人々や滞在している日本人といった多くの人々とのつながりを通して実践したことや学びをお話し頂きました。講演会には、看護職、医師、教員をはじめ学生の参加もあり、関心の高さがうかがえました。ご講演頂いた吉原菜寿先生、青年海外協力隊での国際協力のご経験から、相互理解のための営みの体験についてお聞かせ頂き、ありがとうございました。

主催：看護職キャリア支援センター 教育プログラム開発部門



※詳しい内容はホームページに掲載しています。 <https://www.asahikawa-med.ac.jp/ncsc/archives/11097>

「キャリアデザインセミナー」を開催しました

令和5年12月12日、キャリアを下支えするスキルの向上を目的として、合同会社友歩 代表、日本実務能力開発協会 理事長の上前拓也氏をお招きし、『相手を思いやる伝え方～心の距離が近づくコミュニケーション～』というテーマでご講演をいただきました。内容は、〈アサーティブコミュニケーション〉〈アサーティブな伝え方〉〈相手に安心感を与える伝え方〉〈感情のコントロール〉の4つで、演習を交えながら進められました。様々な組織やチーム、職場において、アサーティブなコミュニケーションが重要視されています。適切な自己主張の仕方を身につけ、価値観や立場の違う同僚や多職種と、率直・対等にコミュニケーションを行えるよう今回の学びを現場で活かしていきたいと思えます。

主催：看護職キャリア支援センター キャリア支援部門（現・生涯学習支援部門）

共催：病院看護部



※詳しい内容はホームページに掲載しています。 <https://www.asahikawa-med.ac.jp/ncsc/archives/10359>

「学生と看護職のセミナー（二輪草セミナー）」を開催しました

令和5年11月14日、似顔絵セラピー・プロジェクト 村岡ケンイチ先生を講師としてお迎えし、新しいアートの世界を作り上げた先生の人生とともに、キャリアデザインとその考え方についてご講演いただきました。講義後のアンケートでは、「芸術と医療の融合は興味深い視点だった」「戦略的なキャリアデザインの講義はとても面白かった」「職員・患者ともにアートで楽しめる環境がくれたらよいと思った」「患者の話聞きながら鍵となるものを見つけて似顔絵に取り入れていくところは全人的視点で看護にも通じるものを感じた」などの記載がありました。村岡先生には、日中に似顔絵セラピー、夕方にご講演というタイトなスケジュールにも関わらず、終始素敵な笑顔でお話しいただきました。心より感謝申し上げます。

主催：看護職キャリア支援センター キャリア支援部門（現・生涯学習支援部門）

共催：二輪草センター



※詳しい内容はホームページに掲載しています。 <https://www.asahikawa-med.ac.jp/ncsc/archives/10193>

「外国人患者対応能力向上に向けたワークショップ」を開催しました

令和5年10月31日、昨年に引き続き、順天堂大学大学院医学研究科医学教育学 教授 武田裕子先生を講師にお招きし、医療で用いる「やさしい日本語」の実践編ということで、外国人患者対応能力向上に向けたワークショップを開催しました。「やさしい日本語」とは、相手に合わせてわかりやすく伝える日本語で、日本語を母語としない方、高齢者、障がいのある方など、様々な方に用いられます。ワークショップでは「やさしい日本語」を使用し、シナリオに沿ってロールプレイを行いました。東川町立東川日本語学校に在籍の留学生さんに模擬患者をお願いし、特別協力を頂きました。看護職をはじめ、コメディカル、教員、医学生の参加もあり、「やさしい日本語」の必要性の認識と関心の高さがうかがえました。

主催：看護職キャリア支援センター 教育プログラム開発部門

特別協力：東川町立東川日本語学校



※詳しい内容はホームページに掲載しています。 <https://www.asahikawa-med.ac.jp/ncsc/archives/10135>

令和5年度「助産師セミナー」&「助産師交流会」開催報告



助産師セミナーは令和6年3月8日(金)の9時45分～12時00分に、助産師交流会は同日の13時30分～16時00分に開催しました。

両イベントの報告は以下をご覧ください。また、キャリア支援センターホームページ内に掲載中の実施後のアンケート結果も別途ご参照ください。

「助産師セミナー」

場所：本学看護学科棟2階C講義室 対象者：本学を卒業した助産師

参加者：37名（卒業生14名、在学生1～4年26名）

本セミナーは、卒業生の助産師がキャリアアップできるよう支援することを目的に開催しました。テーマは「本学卒業生の様々なキャリアの実際」とし、本学を卒業した助産師同士の交流を対象に、かつ本年度は在学生の聴講も許可し、卒業生5名からご自身のキャリアを約20分程度ご講演いただきました。

助産師さろんlankaを開業された中谷ゆり恵先生（13期）、日本赤十字社医療センターにご勤務されていた佐藤咲希先生（18期）、森産科婦人科病院に勤務する小野田ひかる先生（18期）旭川医科大学看護学科の助教、吉原茉寿先生（9期）と出村唯先生（18期）から、ご自身のこれまでのキャリアの実際をご講話いただきました。年間2000件、1000件の分娩数である施設助産師の実際から業務の共通性や違い、施設助産師を経たのち開業によりさらに目指すべき助産師のやりがいを追及していく熱意、あるいは青年海外協力隊での助産師活動の実際、本大学病院の助産の実際や大学院で学ぶ意義など、多様な側面からの講話がなされ、卒業生はもちろんのこと本年度は在学生も聴講可能としたことにより、在学生にとっても将来の助産師としてのポートフォリオを描くことに役立つようでした。



「助産師交流会」

場所：本学看護学科棟2階 A・B・C講義室

開催方法：対面式の講話と各教室に分かれたフリーディスカッション

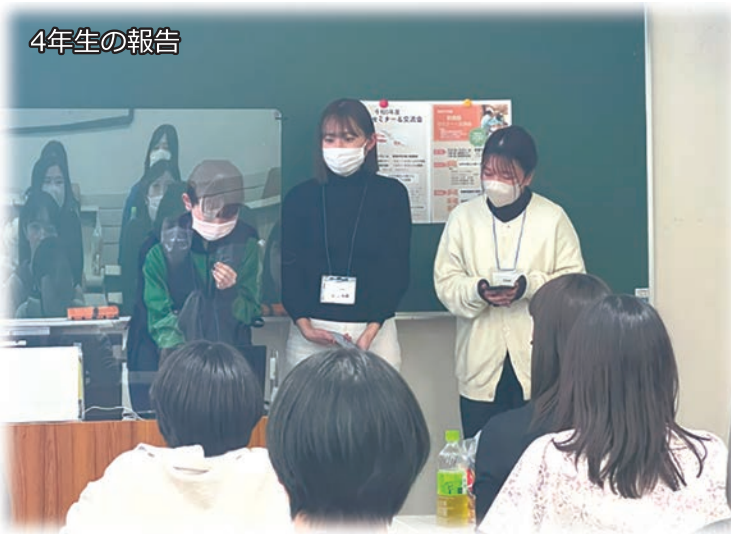
参加者：32名（在学生1～4年19名、卒業生13名）

助産師交流会は、助産師を目指す1～4年の在学生と卒業生助産師が直接交流することで助産師課程における学びの道しるべとなるよう支援することを目的に開催しました。教員による助産師課程の概要を説明後は、3名の卒業直前の助産師課程選択学生、大場さん、柿崎さん、小峰さんから助産課程の学びの実際を、さらに卒業生からは実習施設3施設から小野田ひかるさん（18期）、茂手木典絵花さん（23期）、楯典子さん（24期）により施設の助産の実際をご講話いただきました。その後、3部屋に在学生と卒業生がわかれてのフリーディスカッションを行いました。

直後アンケート結果から、在学生は助産師課程選択の決定、学ぶ意義、就職情報の入手、助産師になることへの動機付けに、卒業生には有意義な時間、初心を思い出せた時間、明日からの仕事の活力になることに役立った、といった高評価をいただきました。

在学生、卒業生ともに有意義な時間を過ごすことができた交流会であったと思います。

4年生の報告



グループトーク



集合写真



共催：看護学科 母性看護学・助産学領域

主催：看護職キャリア支援センター 地域看護職支援部門（現・地域看護職連携部門）

令和5年度 保健師セミナー 開催報告



日 時：令和6年3月8日(金) 旭川医科大学看護学科D 講義室
参加者：看護学科1～4学年37名、1年目保健師9名 計46名

本セミナーは4年ぶりの対面開催とし、先輩後輩の交流を密に図ることができました。保健師課程の学習や保健師の活動内容についてより理解が深まり、将来のキャリアを考える機会となりました。

看護学科同窓会と看護職キャリア支援センターとの共催で専門職業人としてキャリアを考える機会として開催しています。以下、セミナーの様子をご報告いたします。

午前の部：保健師の視点や技術を学ぶ～同期の仲間と励んだ濃い1年間

第4学年保健師課程の学生から、保健師は「地域を看護する」という視点が特徴的で個別支援、小集団への健康教育、地域ケア会議など看護の対象が個から集団、地域へと広がることが報告されました。技術の学習では、保健師役・住民役になりきってロールプレイを行い、実習で学びを深めたこと、同じ道を目指す仲間と過ごす1年は多忙な中でとても充実していたとのことでした。就職活動は、保健師を志望したきっかけを振り返り、どんな地域で働きたいか、自分が重視することをよく考え就職先を決めるとよいとアドバイスもありました。交流会では自由に質問し、語り合い、1年間の学習と就職までのプロセスをイメージ化する時間となりました。4年生から後輩へ「この先、選択肢がたくさんあって迷うと思いますが、どんな道でも皆さんの選択を応援します」というメッセージが送られました。



午後の部：十勝でともに働く1年目保健師体験談 講師 清水町&帯広保健所

自治体保健師には市町村と保健所で働く道があり、同期が同じエリアで働くこともあります。今回は、十勝管内で働く1年目保健師の方2名にご発表いただきました。

市町村と保健所の活動体制や役割は一部異なりますが、保健師として住民の方に寄り添い相談対応することは共通しています。地区を受け持ち家庭訪問や健診などで住民の方に顔と名前を覚えてもらう嬉しさ、心に残っている住民の方との関わり、保健師として地域ニーズをもとに事業の企画を担当するなど活動の実際について、1年間を振り返りご紹介いただきました。また、少しずつ職場に慣れ、プリセプターの先輩に相談しながら活動する現任教育の体制や、プライベートの楽しみなどもリアルに語っていただきました。



交流会では、9名の1年目保健師の方にグループに入っただき、4月から働く4年生の相談に対応したり、保健師のやりがいや難しさを語り合う時間となりました。

○先輩・後輩の交流から未来へ・・・看護と保健師の学習の両立・優しくかっこいい先輩への憧れ・リアル

参加者の声として、アンケート結果を一部ご紹介します。

1-3年生より：「保健師課程のリアルなお話を聞いて良かった。看護との両立は大変だが仲間と乗り越える楽しさを教えていただき保健師を目指そうと思った」、「保健師という職業に憧れだけでなく、相談や業務が舞い込んでくる中で働くことの大変さも知れた」、「もともと保健師志望でしたが、セミナーに参加し、もっと本気で保健師になりたい気持ちになった」、「選考試験や就職活動など間近に迫った内容を詳しく教えて頂けて、保健師を志望する意思がより一層固まった」、「先輩方が優しくかっこよく、こんな保健師になりたいと感じた」、「今回対面でお話でき、連絡先を交換させて頂いたり密に繋がることができ参加して良かった」等々。

4年生より：「後輩へ保健師課程の経験を伝えることで1年間の締めくくりができた」、「1年目保健師の先輩の経験を聞き、4月から新生活への不安が和らぎ、保健師として頑張ろうと改めて感じた」交流を通して未来の選択につながるセミナーとなりました。ご参加ありがとうございました。



保健師セミナーの様子

4年生報告「保健師課程の演習・実習・就職活動の実際～9期生～」

ロールプレイ



シンポジウム「1年目保健師の体験」



交流会の様子



講評 看護職キャリア支援センター
地域看護職支援部門長



なつかしの学び舎「実習室」にて 1年目保健師&4年生

主催：看護学科 公衆衛生看護学領域
 共催：看護職キャリア支援センター 地域看護職支援部門（現・地域看護職連携部門）
 旭川医科大学医学部看護学科同窓会

2023年度後期「企画に対する学生評価」

2023年度後期の「企画に対する学生評価」より、大学ホームページへ掲載することといたしました。評価結果及び評価に対するコメントは、以下のURLまたはQRコードよりご確認ください。

① 2023年度後期 科目全体の講義企画に対する学生評価

https://www.asahikawa-med.ac.jp/uploads/files/portal/campus/life/hyouka/2023_zentaihyouka.pdf



② 2023年度後期 実習企画（または演習企画）に対する学生評価

https://www.asahikawa-med.ac.jp/uploads/files/portal/campus/life/hyouka/2023_jissyuhyouka.pdf



③ 2023年度後期 臨地看護学実習企画に対する学生評価

https://www.asahikawa-med.ac.jp/uploads/files/portal/campus/life/hyouka/2023_kangohyouka.pdf



卒業生の動向（医学科）

令和6年3月25日(月)に本学を卒業した学生の進路状況は次のとおりです。
なお、個人情報保護法関連法律等の関係で氏名は掲載しておりません。

(学生支援課)

区 分		大学及び病院名等	令和5年度卒業生		
			男	女	計
進 学	小	計	0	0	0
就 職	道 内	本院（旭川医科大学病院）	13	11	24
		北海道大学病院	1	0	1
		その他	43	13	56
		計	57	24	81
	道 外	大学関係病院	4	3	7
		その他	25	10	35
		計	29	13	42
小		計	86	37	123
未 定 ・ その他			8	2	10
合 計			94	39	133

上記以外の病院名

道 内：JA 北海道厚生連旭川厚生病院・JA 北海道厚生連帯広厚生病院・JA 北海道厚生連札幌厚生病院
KKR 札幌医療センター・NTT 東日本札幌病院・旭川医療センター・旭川赤十字病院・岩見沢市立病院
小樽市立病院・帯広協会病院・北見赤十字病院・勤医協中央病院・釧路赤十字病院
国立病院機構旭川医療センター・国立病院機構北海道医療センター・札幌徳洲会病院
札幌東徳洲会病院・市立旭川病院・市立釧路総合病院・市立稚内病院・砂川市立病院
製鉄記念室蘭病院・JCHO 北海道病院・JCHO 札幌北辰病院・斗南病院・留萌市立病院

道 外：自治医科大学附属病院・横浜市立大学附属病院・広島大学病院・日本大学医学部附属板橋病院
横浜市立大学附属市民総合医療センター・慶応義塾大学病院・新武雄病院・トヨタ記念病院
津田沼中央総合病院・公立福生病院・鶴岡市立荘内病院・社会医療法人愛仁会千船病院
千葉県立がんセンター・高槻病院・福井赤十字病院・南部徳洲会病院・友愛医療センター
神戸市立医療センター中央市民病院・医療法人社団成馨会千葉メディカルセンター・君津中央病院
富士宮市立病院・公立豊岡病院・奈良県西和医療センター・藤沢湘南台病院・柏厚生総合病院
宮崎県立延岡病院・牛久愛和総合病院・JA 神奈川厚生連伊勢原協同病院・新小山市市民病院
市立伊丹病院・水戸済生会総合病院・筑波メディカルセンター病院・一宮西病院・三重県立志摩病院
神戸掖済会病院・国立病院機構東京医療センター・日本赤十字和歌山医療センター
千葉県立青葉病院・さいたま市立病院・静岡市立静岡病院

卒業生の動向（看護学科）

令和6年3月25日(月)に本学を卒業した学生の進路状況は次のとおりです。
 なお、個人情報保護法関連法律等の関係で氏名は掲載しておりません。

(学生支援課)

区 分		大学及び病院名等	令和5年度卒業生				
			男	女	計		
進 学	道 外		0	1	1		
	小 計		0	1	1		
就 職	道	看護 師	本院（旭川医科大学病院）	0	28	28	
			北海道大学病院	1	2	3	
			札幌医科大学附属病院	0	6	6	
			その他	1	10	11	
	内	保健 師	地方自治体	0	6	6	
			助産 師	本院（旭川医科大学病院）	0	2	2
				札幌医科大学附属病院	0	1	1
				その他	0	0	0
			計	2	55	57	
	道 外	看護 師	大学関係病院	1	0	1	
			その他	0	1	1	
		保健 師		0	1	1	
			助産 師		0	0	0
			計	1	2	3	
小 計			3	57	60		
未 定 ・ その他			0	0	0		
合 計			3	58	61		

上記以外の病院名および自治体名

道 内：旭川市・東川町・上富良野町・佐呂間町・上士幌町・深川市・手稲溪仁会病院
 KKR 札幌医療センター・NTT 東日本札幌病院・たかみや眼科・留萌市立病院・旭川高砂台病院
 JA 北海道厚生連旭川厚生病院

道 外：東京医科大学八王子医療センター・仙台厚生病院・千葉

令和6年度保健管理センター健康相談日

主な相談内容	相談医		定期相談日	相談時間
内科・外科	第二外科 医師	石川 成津矢	毎週 木曜日	月～金 昼休み
内科	第一内科 医師	蓑島 暁帆	毎週 月曜日	
	第二内科 医師	栗垣 彩華	毎週 水曜日	
	第三内科 医師	岡田 哲弘	毎週 火曜日	
*精神神経科	精神神経科 医師	坂内 聖	要予約	
*皮膚科	皮膚科 医師	梅影 香央里	要予約	
*婦人科	産科婦人科 医師	横浜 祐子	要予約	
*歯科	歯科口腔外科 歯科医師	佐藤 栄晃	要予約	
健康相談全般	保健管理センター長 北野 陽平		原則として毎週金曜日昼休み 緊急の場合にはそれ以外でも可	

- (注) ・*印の付いている科の相談希望の場合は、事前に予約が必要です。
・定期相談日等は、都合により変更することがあります。

◎保健管理センターの開所時間・連絡先

平日 8:30～17:00 (土・日・祝日は閉所)

電話 0166-68-2768

メール hokekan.amu@asahikawa-med.ac.jp



体温計は、ありますか？
健康管理のために、
用意しておきましょう！！

保健管理センター来所時には、保険証は必要ありませんが、他医療機関を受診する場合には必要となります。必ず用意しておきましょう。



旭川医科大学役員等紹介

令和6年4月1日付けの役員等は、下記のとおりとなりましたのでお知らせします。

職 名	氏 名
学長	西 川 祐 司
理事、副学長（財務、評価、医師の働き方改革担当）	古 川 博 之
理事、副学長（入試、教育、人事・組織担当）	奥 村 利 勝
理事（社会連携担当）（非常勤）	辻 泰 弘
理事（地域医療担当）（非常勤）	佐 古 和 廣
副学長（研究担当）	川 辺 淳 一
副学長（医療、国際交流担当）	東 信 良
副学長（産学連携担当）	藤 谷 幹 浩
医学部医学科長	奥 村 利 勝
医学部看護学科長	升 田 由美子
大学院博士課程医学専攻長	川 辺 淳 一
大学院修士課程看護学専攻長	藤 井 智 子
学長補佐（IR 担当）	松 本 成 史
学長補佐（広報担当）	本 間 大
学長補佐（地域医療医育成担当）	牧 野 雄 一
図書館長	藤 谷 幹 浩
病院長	東 信 良
副病院長（外来・入退院担当）	藤 谷 幹 浩
副病院長（多職種連携担当）	大 田 哲 生
副病院長（病院経営、医療機器担当）	本 間 大
副病院長（事故防止担当）	松 本 成 史
副病院長（安全問題、患者サービス、ボランティア担当）	井戸川 みどり
病院長補佐（医療従事者教育担当）	田 崎 嘉 一
病院長補佐（臨床研修担当）	牧 野 雄 一
病院長補佐（臨床倫理担当）	木 下 学
監事（業務）	鈴 木 義 幸
監事（会計）	桶 利 光

教員の異動

令和6年3月31日	定年退職	医学部皮膚科学講座	教授	山本明美
令和6年3月31日	定年退職	医学部腎泌尿器外科学講座	教授	柿崎秀宏
令和6年3月31日	定年退職	医学部生化学講座	准教授	大保貴嗣
令和6年3月31日	退職	医学部看護学講座	教授	及川賢輔
令和6年3月31日	退職	医学部内科学講座(消化器内科学分野)	講師	岡田充巧
令和6年3月31日	退職	病院内科(血液)	講師	進藤基博
令和6年3月31日	退職	病院産科婦人科	講師	高橋知昭
令和6年3月31日	任期満了	保健管理センター	特命教授	川村祐一郎
令和6年4月1日	昇任	医学部生物学	教授	日下部博一
令和6年4月1日	昇任	医学部看護学講座	教授	平義樹
令和6年4月1日	昇任	医学部生化学講座	准教授	矢澤隆志
令和6年4月1日	昇任	医学部耳鼻咽喉科・頭頸部外科学講座	准教授	岸部幹
令和6年4月1日	昇任	病院臨床検査・輸血部	准教授	坂本央
令和6年4月1日	昇任	医学部生化学講座	講師	中島恵一
令和6年4月1日	昇任	医学部病理学講座(腫瘍病理分野)	講師	田中宏樹
令和6年4月1日	昇任	医学部内科学講座(消化器内科学分野)	講師	高橋賢治
令和6年4月1日	採用	医学部看護学講座	教授	菅原峰子
令和6年4月1日	採用	医学部内科学講座(内分泌・代謝・膠原病内科学分野)	教授	野本博司
令和6年4月1日	採用	医学部眼科学講座	准教授	横田陽匡
令和6年4月1日	採用	病院内科(血液)	講師	高橋秀一郎
令和6年4月1日	配置換	医学部看護学講座	准教授	原口真紀子
令和6年4月1日	配置換	病院耳鼻咽喉科・頭頸部外科	講師	大原賢三
令和6年4月1日	配置換	病院耳鼻咽喉科・頭頸部外科	講師	熊井琢美
令和6年4月18日	昇任	医学部社会医学講座	講師	佐藤遊洋
令和6年4月30日	辞職	医学部眼科学講座	講師	木ノ内玲子
令和6年5月1日	昇任	医学部生物学	准教授	日野敏昭